

獅子の時代が道開いた

（第三種郵便物認可）

北海道から九州まで全国の繁盛店を見て回った。そこで、これからは直営店を展開する方針に決めた。81年は喜多方に2号店、84年に会津高田に3号店、87年に4号店、89年に5号店と次々に開店した。

まだまだ未熟な店だったが、社員とお客様に支えられてきた。「昔、仲町に店があった頃、夕方にケーキを4個買って外へ出ようとした時、自分の不注意でケーキの箱を落としてしまった。そうしたら店員の方が何も言わずに新しいケーキを箱に入れて渡してくれた。私はその日から太郎庵以外でケーキを買つたことがない」。喜多方市のお客さまが今の店に来て「お話ししていかれたそうだ。喜多方店が開店して40年になる。

そんな中、90年代にはいよいよ会津若松市の進出に踏み切ることになった。

(聞き手 渡辺司)



1985年に開かれた太郎庵の経営方針発表会。全国の繁盛店を見て回り、長期ビジョンを熱く発表した

R効果で単品で1億円を売り上げた。お盆には3日間、24時間機械を動かし続けた。夜中は私と父、早朝からパートさんにも来てもらつてピーチを乗り切った。獅子の時代はヒットし、スタートしたばかりの店の資金の支えになつた。しかし大河ドラマの恩恵は一年。次の方向性を探るた

太郎庵会長 目黒 督朗

7

会津坂下町に念願の店を出したものの、売上はなかなか厳しい日が続いていた。そんな時、たまたま見た夕方のニュースで、翌年(1980年)のNHK大河ドラマのタイトルが会津藩と薩摩藩を舞台とした「獅子の時代」だと知った。すぐこの名前の商品を出そうと弁理士事務所に電話をかけたが、時間外だった。そこで弁理士の自宅の電話を調べてかけて商標登録を急いだ。後から聞いたが、次の日は朝から登録の電話が鳴りやまなかつたそうだ。

会津の店が九州の店より登録が早かつたとして、新聞では「戊辰戦争の仇を取った」と報道された。思い立つたら行動する。チャンスの女神には後ろ髪がない。商品は粒あんの入った素朴な草餅だった。NHKから製造の様子などについて取材を受け、全国放送された。P

マイストーリー

ひと

human

命懸けの覚悟固め出店

続いていて、お断りをしたが「せめて場所だけ見てくれ」との強い依頼だった。「断つてくる」と会社を出たが、物件は内装もほとんど仕上がりっていた。そのため、その場で「出店します」と返事した。会社に戻って報告したらみんな驚いていたが、私は「何とかなる」と言い切った。4月に7店舗目の塙川店を開店させ、5月に会津坂下町の郊外に本社工場を新設移転。一気に生産能力が上がり、7月には8店舗目の工場売店を開店させた。

95年には「太郎庵宣言」を発表して9店舗目となる会津総本店を開店。年商10億円を超えて、約束の海外への社員旅行を実現した。工場投資もあって経常利益は200万円とお金の余裕もない中、グアムへの旅、それは1泊3日という超格安な強行日程だった。祝賀会で社員からは「今度はハワイへ行きたい」と言われ、「次は経常利益8千万円にならなければ」と答えた。(聞き手 渡辺司)



1996年夏のグアムへの社員旅行。1泊3日の超格安な旅行だったが、青い空の下、楽しそうな社員の姿は忘れられない

ぎりの生産が出来てほしいう」との話があった。ぎりの生産が出来てほしいう」との話があった。ぎりの生産が出来てほしいう」との話があ

92年の初めに取引銀行から「塙川に物件があるから出店してほしい」との話があった。ぎり

5千軒のドアコールをした。2500人が来店し、店に入りきれないと、ありがたい言葉を日々にいたよ」と、待つた。ただいた。

91年度の方針発表会。(1)数年後に年商10億円を達成して海外への社員旅行、南の青空の下で達成祝賀会を開く(2)新工場を完成し、それまでの超ブラックな勤務態勢ではなく4週6休とし、次に週休2日制にする(3)社員の一人一人が人生を懸けるに足る太郎庵を目指す」と掲げた。新工場建設は間に合わないものの、91年12月、会津若松市に6店舗目となる会津城南店を開店。プレオープンに当たり、

手作りの生産はぎりぎりで、工場投資という大きなリスクも乗り越えなければならないかった。年商は10億円。借り入れは10億円あり、工場投資に3億円とすると年商と同額になる。銀行から3億円を借り入れ、生命保険に個人で3億円の保険を掛けるなど、文字通り命懸けの覚悟だった。

1990(平成2)年の太郎庵は計5店舗。

次は会津若松市への段階に来ていたが、大きな壁があった。

太郎庵会長 目黒 督朗

8

マイストーリー

ひと

human

自分の使命再確認した

に折った。「わたしたちは、いのちをよさしい、心ときめくお菓子を通して会津の風土を描き、お客様と共にやすらぎとぬくもりのある、しあわせ文化を創造します」。そして書いた。徹底した衛生・品質管理に努力を惜しまない。会津の素材、季節感あふれる食材にこだわった商品を作る。菓子で素晴らしい会津の風土を描き多くの人に伝える。農家の方と連携し、地域が元気になる企業経営を目指す。お客様に本当に必要なものなのかといふことを宣言に基づいて忠実に進める」と。「人は50歳までに開けなければならない手紙を預かって生まれて来ている。これは人生でどんなことをやるのか書いてある手紙である」。ある人がこう言っていたのを思い出した。太郎庵宣言は私にとって、まさにその手紙である。思っている。会津の良さを菓子で描く取り組みは、会津が奥深いだけにどこまでも続く。会津を深耕し、会津の素材を贋た菓子作りこれからも挑戦していきたい。

(聞き手 渡辺司)



2015年に増設した新工場部分。菓子作りでは徹底した衛生・品質管理に努力を惜しまない

太郎庵会長 目黒 督朗

9

新工場での生産能力が高まり、菓子の販売店を次々に開店したが、決して順風満帆なことはかりではなかった。いくつもの障害を乗り越え、今までの会社経営に至っている。忘れていいのは衛生事故だ。

人生で一番大変だった日。2006(平成18)年9月14日。太郎庵が製造する生菓子「あずきマロンの天神さま」に消費者から「菓子から糸が引いている」との通報があり、回収命令が出された。栗の糖度が低かったのが原因。栗が甘いとの意見から、その年の発売時点での砂糖を減らしていたのだ。

お客様の対応で浪江町からの帰郷に会津総本店に電話すると、スタッフからは「あなたに新聞に出たのに、お客様がたくさん来ていただいてます」との返事だった。「何でもきないけれど買い物だけはできるので来た」「大変だと思って来た」と太郎庵を応援する人が来店してくれた。その話を聞いた時、私は涙で車を運転できなくなっていた。

その時、私たちの使命である「太郎庵宣言」

マ
イ
ス
ト
ー
リ
ー

human

ひと

郷土の誇り 足跡伝える

箱に詰め、坂下の地酒を冷やして持つてきました。今年は十三回忌。春日さんがいたことをプロンズ像にして残しましょう」。私は1月の全国春日八郎偲ぶ会新年会でスピーチした。箱を開けると解けかかった雪がこぼれ「おお」と歎声が上がった。SLの汽笛とともに除幕する計画で、出席者に酒をついで回った。1週間後、1人から100万円が振り込まれると、1千万円はあつという間に集まつた。中学校の同級生だった坂下駅長からSLの通行日を聞き、日程を調整した。

除幕式でプロンズ像の脇にたたずんだ奥さんが何度も見上げては立っていた。「後ろ姿が春日そっくり」。彫刻家にとっては最大限の褒め言葉がそうだ。除幕と同時に汽笛が「ボッボー」と何度も鳴った。まさに私が1月に話していたワンシーンが現実となつた。年々春日さんを知る人も少なくなってきたが、很多人が一人でもいる限り、3年後の生誕100年にはまた思い出に残る企画を考えたい。

(聞き手 渡辺司)



JR会津坂下駅前で行われた故春日八郎さんのプロンズ像の除幕式。春日さんの像と並んで立つ奥さま（右手前）と偲ぶ会の飯村孝男会長④ら。いろんな方の熱い思いが形になった

太郎庵会長 目黒 睿朗

10

私の古里は春日八郎さんが生まれた町。菓子の修業をしていた頃、「会津坂下の生まれ」と言っても分かつてもらえたが、春日さんの名前を出すと認識してもらえた。春日さんが1991(平成3)年10月22日亡くなられた。郷土の誇りである春日さんがいたことを何が残さなければ、それが会津人の誇りと思い、春日八郎顕彰事業を立ち上げ実行委員長として活動した。春日さんの奥さまにカラオケ大会や遺品の展示、映画の上映をやりたいと伝えた。92年10月、町内で全国春日八郎カラオケ大会や映画「赤いラシップ」の終列車」「別れの一本杉」の上映が実現した。2003年の十三回忌には、JR会津坂下駅前にプロンズ像を建立、10月12日に除幕した。前年に彫刻家の若杉信子さんに話を持ち掛け、プロンズ像と並んで写真が撮れるよう台座を低くする形で建立することに。予算は約1千万円。私は「集めてみせる」と言い切った。

「『別れの一本杉』の歌碑に積もった雪を

マイストーリー

ひと

human

ランプともし続けたい

は前日に現地に入り、飛行機から降りてくる社員一人一人に「ありがとう」と生花のレイを掛けた。みんなの眼そうな目からは涙が流れ、私も目頭が熱くなり胸が詰まった。群青色の海にハワイの熱く焼けた真っ赤な夕日が落ちる中、船が出て行くスター・オブ・ホノルルでのサンセットディナー・クルーズ。ハワイの音楽とともにパーティーをした。

みんなと共に目標に向かい、その成果を祝い合う。私にとっての一番の喜びと幸せは社員の喜ぶ顔を見る時だ。トップは退いたが、お菓子を作り続けることは引退したと思っていない。「まだ足りぬ 創り続けて あの世まで」。そんな気持ちでもつともっとおいしくお菓子を作りたい。看板商品「会津の天神さま」が太郎庵の中で東の横綱なら、西の横綱も作ってみたい。コロナが収束したら、またお菓子の勉強会に行こう。耳が遠いので一番前の席で。(聞き手 渡辺司)

*28日からは、東北サファリパーク、エビスサー

東京五輪の聖火リレーでは感謝の気持ちを込めて走った。おいしい菓子作りを求めてまた歩み続ける覚悟だ。



太郎庵会長 目黒 督朗

11 完

東京五輪の聖火リレーは全国に聖火をつなぐのが目的だが、私は太郎庵のシンボルでもある「ランプの心」を胸に走った。長年、電話対コンクールなどでお世話になっているNTTのスポンサー枠に応募し、実現した。40年前に太郎庵を始める時、一灯のランプを掲げる気持ちで店をつくった。「おいしいでぬくもりのある灯をともす」という自らの人生を照らして来たランプと、聖火を持つて走ることが自分の中では重なって思えた。会津若松市の鶴ヶ城の三の丸から廊下橋を渡る220m、ここまで来られたことに感謝する「ありがとうございます」の言葉を100万回唱える気持ちで走った。会津人にとってお城の中を走れるなんてこんな名譽なことはない。

東京で修業していた時、憧れ帰りたかった会津で菓子屋をやっている。まるでそれは奇跡のように思え、本当に有り難い。2年前、社長を交代するまでの40年間は会社の先頭に立ち、全力で走ってきた。振り返ってみれば楽しいことの方が多かった。経常利益目標の8千万円を達成し、ハワイへの社員旅行。私は

マイストーリー

ひと

human